

『鏡花全集』未収の書簡

——星野麥人宛の五通について——

吉 田 遼 人

一、星野麥人について

星野麥人は、明治十年四月十三日、東京市牛込区水道町三十六番地に生まれた。本名は、仙吉。老衰のため歿したのは昭和四十年三月十二日、享年八十九。「麥人」という筆名については、生前、「式亭三馬のまねを致し、拾字^{ひそひそ}して麥と人との二字を得ましたのです。」^(一)（^{ハガキ}回 答 私 の 雅号・ペンネームとその由来『実業の日本』第四十一巻第一号、昭和十三年一月）と打ち明けられていた。

「明治大正昭和三代にわたって俳壇の大御所として重きをなしてきた」⁽²⁾ 麥人の俳業については、要を得た次の記述がある。

泉鏡花の書簡は、『鏡花全集』別巻（岩波書店、昭和五十一年三月）に七十二通、同「月報29」に一通が収載されたのち、『鏡花全集』別巻（第二刷／岩波書店、平成元年一月）の「拾遺」において十九通が追加、『新編 泉鏡花集』別巻一（岩波書店、平成十七年十二月）の「拾遺」においては六十八通⁽¹⁾が新たに収録された。その後、『泉鏡花研究会会報』上にかぎっても、第二十三号（平成十九年十二月）以降、『本稿執筆の令和四年九月時点で最新号となる第三十七号（令和三年十二月）までに十通が紹介されている。泉鏡花の生涯を追うためにはもちろんのこと、手がけられた小説、戯曲等への理解を深める一助とするうえでも、これらの書簡群が重要な価値を有していることは言を俟たない。

本稿は、このたび新しく確認することのできた五通の鏡花書簡についての調査報告である。五通はすべて、俳人・星野麥人^{ばくじん}に宛てられている。以下、それぞれの書簡の内容を読み解き、その背景を探ることをとおして、鏡花と麥人との交流の一面を照らし出したい。

はじめ大野洒竹選の「毎日俳壇」に、のち正岡子規選の「日本俳壇」に投句し、そのうえ子規庵句会にも列席して俳句の修業を積んだ。子規編『春夏秋冬』に選ばれた句は四九句の多きに達している。子規庵に出入りするかたわら、尾崎紅葉の知遇を得、硯友社の人々とも交わりを結び、また、角田竹冷らの秋声会にも参加した。明治三四年紅葉の指導下に晩鐘会を結び「俳藪」を創刊し、四二年「卯杖」を合併し、同年四月「木太刀」と改称し、白人会が東京に移ってからは専門俳人として参加し、のちこれをも同誌に合併した。以後これを経営して没年に至るまで俳句一本に生涯をかけた。

（後略）

右を補っておくと、「大野洒竹選の毎日新聞俳壇投句」にはじまる麥

人の「俳句の出発」は、「明治二九年」のことであり、「俳句以前の経歴」としては、「日本大学・国民英学会に学び軟文学の珍書房」「三久」勤務(約一〇年)を経て内務省に二年勤めたという(楠本憲吉「麥人翁の生涯と俳業」『俳句』昭和四十年五月)。また、秋声会への参加時期は、みずから振り返るところによれば、「その席末に出るやうになつたのは、明治三十一年二年度の頃であつた」ようだ(「春夕(秋声会の想ひ出)」『俳句研究』昭和十六年三月)。

このほか、星野麥人の生涯と俳業を知るうえで、楠本憲吉との「対談俳句史・第七回 揺籃期の人々」(『俳句』昭和三十五年二月)が詳しい。

従来、星野麥人に宛てた泉鏡花の書簡の数は、計三通が確認されていた。『鏡花全集』別巻の「書簡」に収められた明治三十九年十二月十九日付(書簡番号「四二一」)のはがき、明治四十年八月三十一日付(書簡番号「四六」)のはがき、それから『鏡花全集』巻二十七に「紀行」として分類されている「熱海の春」(『俳藪』寅一、明治三十五年一月十九日)である。紀行「熱海の春」が麥人宛書簡と認められることについては、すでに田中勳儀の指摘がある。その初出本文には「末尾に記された「二日／鏡花／麦人様」という発信日・署名・宛名の記載」に加え、「一月二日／豆州熱海／対孝館にて／泉鏡太郎」と、おそらく封筒裏面に記されていたと思われる、発信者鏡花の墨蹟が掲載されており、その事実から、この紀行文が「明治三十五年一月二日付の星野麥人宛泉鏡花書簡であり、実際に発信されたものだったことが判明する」のである⁽⁴⁾。

すなわち、これまで知られていた麥人宛・鏡花書簡は、明治三十五年、三十九年、四十年にしたためられた三通を数えるばかりであった。次節では、明治三十六年から四十年までのあいだに発信されたと考えら

れる別の五通を取り上げてゆく。

二、五通の星野麥人宛・泉鏡花書簡

麥人より四歳年長の鏡花が歿したのは、昭和十四年九月七日。その翌年、麥人は俳誌『木太刀』第三十八巻六月号(昭和十五年六月)に「手紙もの語／泉鏡花(下)」を掲載しており、後者に、鏡花から届いた七通の文面が紹介されることとなった。うち二通は、先述したはがき(書簡「四二一」と紀行「熱海の春」)に該当する書簡と重なるため、ここでは残りの五通を発信年月日順に取り上げて、手紙の内容および文脈について考証を試みたい。

書簡1 明治三十六年三月二十四日付・星野麥人宛

先生の御病症は御存じの事、それに関して衆議を致度義有之候間二十五日午後一時より神楽町二丁目二十二番地泉方まで相違なく御集會被下度候也

二十四日

泉 鏡花

(三十六年三月)

小栗風葉

この書簡の発信時期は、麥人が書き添えた「(三十六年三月)」という自注によって確定される。文頭で言及されている「先生の御病症」とは、尾崎紅葉が、この三月の三日から十四日までの入院時に胃癌の診断を下されたことを指しているよう。小栗風葉との連名で発信されたこの書

簡は、その「先生の御病症」を受けて、「衆議を致度義」があるため、翌二十五日に、鏡花の家に「御集会被下度候」と呼びかける内容となっている。

文面の背景を理解するにあたって参照したいのは、尾崎紅葉の晩年の日記『十千万堂日録』（『紅葉全集』第十一巻、岩波書店、平成七年一月）である。その「明治三十六年三月二十五日」の項には、次のような一節が書きつけられていた。

午前十一時ふと思付きて上野商品陳列館に赴く、巡覽中胃痛頻々来る。帰途琳琅閣にて寄所寄、紀暁嵐五種、書啓合璧の三種を買ふ（四円八十錢）

二時中餐。牛肉バタ揚三片。鮪さしみ。油拔ケンチヤン。めし二椀。

本日午後一時より鏡花宅に十千万堂出版部に於ける第一編の作として門生集作の挙に就き相談会あり。

食後睡を催し火燵に在り、内子又風邪にて按摩を招く、柳浪子玉子一籃持参訪問。不遇。

書簡の内容に対応するのは、「本日午後一時より鏡花宅に十千万堂出版部に於ける第一編の作として門生集作の挙に就き相談会あり。」という一文にほかならない。この記述により、鏡花宅での「衆議」が、のちに『換菓篇』（博文館、明治三十六年十月）として結実する出版をめぐる「相談会」であったことが確認できる⁶⁾。そして、その「相談会」の開催は、鏡花、風葉の連名になる書簡1を通じて呼びかけられていたのであ

『鏡花全集』未収の書簡（吉田）

り、この事実が新たに判明することとなった。

なお、『換菓篇』の企画を報じた明治三十六年五月十一日付『二六新報』の「社告」（三面）によれば、麥人は「赤つばき」と題した稿を寄せる予定であったようだが、実際に収載されたのは「四季五十二句」であった⁶⁾。

書簡2 明治三十六年（年次推定）九月八日付・星野麥人宛

先生御容躰御かはりもごさなく候

就ては御病床にて御覽ありたき旨御申聞けに相成候間枕上に差上げらるゝ見舞の御文何かおん思ひつきなど御書添へなされ至急御進呈なし下され度くれぐれも申上候

九月八日

神楽町

行事

前掲の書簡1と、この書簡2について、麥人は、「此の二通は紅葉先生御発病後のものでこうした葉箋はまだ何枚かあるが、今此の二つだけをこゝに出す。」との言を添えていた。「紅葉先生御発病後のもの」とは、先に確認したとおり、紅葉が胃癌の診断を受けた明治三十六年三月以降の「葉箋」であることを示していると考えられる。これを受け、書簡2の発信年次を明治三十六年と推定した。

明治三十六年九月八日、この書簡がしたためられた当日の消息は、紅葉の『十千万堂日録』においては確認することがかなわない。明治三十六年七月十二日から九月三十日までのおよそ八十日間、日記がつけられていたのかどうか、それさえ判然としない時期にあたっているため

ある。

一方、その空白期間を補う資料として注目されるのは、『十千万堂日誌』である。筆記者は、紅葉の門下生のひとり、山里水葉と伝えられており、内容は「明治三十六年九月六日から同十月二十八日までの日記を中心とする」。この『十千万堂日誌』のほうを繰ってみると、「明治三十六年九月八日」の項の「(上層の棚)」に、麥人の名前が書き記されていたことを確認できる。『十千万堂日誌』において、日ごとの「(上層の棚)」に書きつけられているのは、その日の来客者の名や、当面の用件などであった。したがって、麥人は、鏡花の書簡²がしたためられた当日に、紅葉の宅を訪問したと推し量ることができそうだ。「頻繁なる集配」が実施されていた当時の郵便事情をふまえれば、鏡花からの書簡を受け取ったのち、ただちに紅葉の見舞いに駆け付けた可能性も十分に考えられるところである。

もっとも、書簡に綴られていたのは、「枕上に差上げらるゝ見舞の御文何かおん思ひつきなど御書添へなされ至急御進呈なし下され度くれぐれも申上候」という依頼であった。当時、牛込区水道町に居を構えていた麥人を、同区横寺町の紅葉宅に呼びつけるような文面とはなっていないことに留意したい。

なぜ、このような「葉箋」が麥人のもとに届けられたのか。この点に関して思い起こされるのは、紅葉が明治三十六年三月二十四日から四月二十四日まで、『二六新報』紙上に断続的に掲載した「不養生誠」であるだろう。これは、紅葉が、自身に届いた「牘毎に」「手づから」「数行の誠を写して、病中やゝもすれば不養生の誠と為し、又別に所欠惟一死にして、平生万事足の末期を慰む」という意図のもとに生まれた企画で

あった(『不養生誠』引)『二六新報』明治三十六年三月二十四日、三面)。計十二回にわたり、のべ三十九名ぶんの見舞い状が紹介されるに至ったが、それらのうちに星野麥人の「牘」は見えない。このときからおよそ半年後、麥人に対して、「枕上に差上げらるゝ見舞の御文何かおん思ひつきなど御書添へなされ至急御進呈なし下され度」といった依頼がなされた背景には、もしかしたら「不養生誠」と同様の企画案が新たに持ち上がっていたのかもしれない。推測の域を出ないが、可能性のひとつとして挙げておきたい。

書簡3 明治三十九年十二月十九日付・星野麥人宛

おふせにまかせて相認め申候

その度胸のよさ御感心下され度イヤ恐縮々々

太祇句集等甚だ御むしん恐入候 早々

十九日

相州逗子 泉 鏡太郎

この書簡の発信時期は、「消印を見ると三十九年十二月十九日とある」という麥人の言及によって確定される。一方、内容を把握するためには、「もうひとつ同じ日の消印」の書簡(鏡花の書簡「四一」と並べる必要がある。そこで次に、書簡「四一」(明治三十九年十二月十九日 東京牛込水道町三十六 星野麥人様/十九日 相州逗子 泉鏡太郎(葉書)の文面を引用しておきたい。

来客としやべりながらお手紙拝見、お急ぎと存じ早速あひしたため、おふせは低くと心得ちがひいたし、はがきに冬の句を撰はず、

たんさくを二三子と合作のつもりに仕り唯今くりかへしお申聞けの趣拝読南無三ちがつたと膝を拍ち申候とも申訳これなくはかきの方はただいくへにも御堪忍下され度、みなかにてありあはさず候まゝ、たんさくはもう一度おん送り下さるまじくやつたなくもかきなほし差上度存じ候

右の書簡「四一」には、「鏡花が勸ちがいをして」麥人の依頼を「果さず」、そのためのお詫びがしたためられていた。¹⁰⁾この内容と照らし合わせると、書簡3はまさしく、鏡花が「心得ちがひ」で返信した先便の「はがき」であつたと判明する。

なお、書簡3には、麥人の依頼に対する応答のみが綴られていたわけではなかつた。鏡花は、麥人に「太祇句集等」を「むしん」していたようである。ここに言及される「太祇」とは、宝永六（一七〇九）年の生まれ（歿年は明和八（一七七二）年）、親交を結んでいた与謝蕪村と並び称される俳人、炭太祇のことを指す。¹¹⁾「太祇の腕前」について、「蕪村の天才に及ばぬ事は言ふ迄も無いけれど、蕪村を除けば天下敵無しである。」と讚えるのは正岡子規にほかならず、次の言明も印象深いものがある。

太祇の句には蕪村のやうなうるはしい句は少いけれど、一句く／＼皆面白き事即ち句の揃ふて居る点に付いては蕪村にも劣るまい。（中略）これ程の太祇が千句の秀逸を残しながら全く世間に忘られて其名をいふてくれる者も無いといふのは実に太祇に対して気の毒な許りで無く我俳句界の恥辱だと思ふ。

『鏡花全集』未収の書簡（吉田）

（頼祭書屋主人「俳人太祇」『ほとゝぎす』明治三十二年三月）

子規がこのように賛辞を惜しまなかつた太祇に、鏡花もまた関心を寄せたひとりであつたようだ。では、鏡花が麥人に「むしん」した「太祇句集」とは、いかなる書冊であつたのだろうか。管見のかぎりでは、「太祇句集」なる出版物を探し出すことはできていない。けれども、ここでは、次の二点が目にとまつたことを報告しておきたい。高浜虚子編『俳諧叢書 第四篇 太祇全集』（ほとゝぎす発行所、明治三十三年三月十日）と、書簡3の八ヵ月前、『ホト、ギス』（明治三十九年四月）に「附録」として収載された「太祇句選後篇」である。

すぐに気がつくとおり、どちらも「太祇句集」という名称が用いられたものでない。とはいえ、それゆえに閑却してしまうのは、早計であるようにも思われる。なぜなら、「太祇全集」を「太祇句集」と呼ぶことへの不自然さはさして大きくないと言えるし、また、虚子が「太祇句集、序跋」（『ホト、ギス』明治三十五年十月）に寄せた前文には「太祇全集を編む時、主として稿本としたる太祇句選の序跋を添附したかりしも障りありて果たさず。」などと記されており（それぞれの傍点は引用者、ここでの「太祇句集」と「太祇句選」が指示する対象はもちろん同一である。後者の〈句集／句選〉の相違は、単なる誤植とも考えられるが、この問題は、「附録 太祇句選後篇」を収めた『ホト、ギス』誌上にも見届けられる。「附録」頁の柱には、「太祇句集後篇」と記載されていたからである。こうした呼称の揺れを考慮に入れるかぎりでは、鏡花が麥人に「むしん」した「太祇句集」が『太祇全集』と「太祇句選後篇」のどちらかであつた可能性は十分に高い（あるいは、明治期に世に出た書冊で

はなく、明和九(一七七二)年刊行の『太祇句選』であったり、もしくはその写本であったりする可能性も、当然ながら捨て切れない。

鏡花が「太祇句集」を「むしん」した相手が、ほかならぬ麥人だったことについては、いくつかの挿話がおのずと思い合わされる。麥人は、別の「手紙もの語」(『木太刀』昭和十四年九月)において、「太祇を探し出したのは、新五子稿を見てからであつた、子規子もやはりさうであつたが、上下二冊のうち、一冊を見ての話であつた。その欠けた分一冊を貸して上げた事がある。そんな発見? をした時にその喜びを語りあふといふことは、実に楽しかつたものであつた。」と、「語るもの、聞くもの総身に力を入れた」往時を感慨深げに想起しており、また、「後に俳書堂から、太祇全集が出る時でも、(中略)虚子氏も随分手を尽くしたものであつた。私のところになども、さうした手紙がある。」と、麥人から「太祇句」を送られたことへの虚子の礼状を紹介してもいた。¹²⁾子規や虚子との思い出からうかがえるとおり、太祇の受容圏の中心近くに、どうやら麥人の存在があつたようである。

加えて、紫吟社の会を「鏡花君の所でやつた時、集つた八、九人で合作の手紙をドイツの小波先生に書いた」(星野麥人・楠本憲吉「対談俳句史」第七回 揺籃期の人々／前掲)思い出にも注目したい。確認しておけば、巖谷小波のドイツ滞在は、明治三十三年九月から三十五年十一月までのおよそ二年間。そのとき「めいめい好きなことを書いて」たなか、紅葉が詠じた句のうちに「祇や来や春夜の角をなふりけり」があつたが、「この句は、祇やというのは私(星野麥人——引用者注)のことで、太祇推讃の時分のこと、来やは柳川春葉が去来を推称するので来といひ、角は其角で谷活東が礼賛するの擲擄しての一句」であつたといふ。

明治三十九年、「太祇句集」を「むしん」する相手として鏡花が麥人を選んだのは、その「太祇推讃の時分」を覚えていたからこそであつただろうか。

書簡4 明治四十年(年次推定) 六月十一日付・星野麥人宛

俳藪御恵与下されありがたく存じたまつり候発句選のこと小生にておまにあい候はゞ御遠慮なくおんつかはし下され度候

六月十一日

相州逗子 泉 鏡太郎

まずは、書簡の発信年について検討しておこう。「相州逗子」から「六月十一日」に発信されていることをふまえると、おのずと、鏡花にとって二度目の逗子滞在期(明治三十八年七月～明治四十二年二月)のうち明治三十九年、四十年、四十一年のいずれかに絞ることができる。

また、「俳藪」への言及も、大きな手がかりとなる。俳誌『俳藪』の刊行期間は、明治三十四年八月から三十五年八月、そして明治三十九年十月から四十年十一月までであり、これらの事実を勘案すれば、書簡4の発信年次は明治四十年と推定することが可能である。

さらに加えて、「発句選のこと小生にておまにあい候はゞ御遠慮なくおんつかはし下され度候」という文面にも着目しておきたい。麥人は、この書簡4と、次の書簡5について、「こんなふうには俳藪の選句について、いやな顔もせずに面倒を見て下されたものだ。」と、鏡花のことを振り返っていた。この回顧は、書簡4が明治四十年の発信であることを裏付ける。というのも、明治四十年五月二十三日発行の『俳藪』第二巻第七号では、「次号課題 ●抱籠、富士詣、日傘」が選者未定のまま予

告されていたが、翌月、六月二十三日発行の『俳藪』第二巻第八号においては、課題句「抱籠」の選者を務めるのが泉鏡花と明記されたからである。「六月十一日」という書簡4の発信月日は、この間に位置づけられるものだろう。したがって、発信年次を明治四十年とする推定は揺るがないと思われる。

書簡5 明治四十年八月（年月推定） 十四日付・星野麥人宛

残暑のみぎりますます、御安康大慶に奉存候

さきごろ御遣はしの御手紙につき発句の草稿御待ち申居り候へども未だ到着いたさず御催促申上ぐるにはござなく候へども小包みの間違もやと為念おたづね申上候

十四日

相州逗子 泉 鏡太郎

発信年月の不明な一通である。ただし、発信月に關しては、「残暑のみぎり」という時候の挨拶によって、八月と推定できそうだ。また、発信年次のほうは、「発句の草稿」をめぐる話題が書簡4と重なることから、同じ明治四十年と推定しておく。

書簡5が明治四十年八月にしたためられていたとすると、文中の「さきごろ御遣はしの御手紙」とは、およそ二カ月前、書簡4のやりとりがあった時期に届いた麥人からの書簡を指しているようにも思われる。

このたびの用件は、未着の「発句の草稿」についての「おたづね」である。鏡花は、先述の課題句「抱籠」に続いて、次回の課題句「行水」の選者も務めることになった（『俳藪』第二巻第九号、明治四十年七月）。

そしてその締切は、八月十日に設定されていた。それでは、八月十四日

『鏡花全集』未収の書簡（吉田）

付で発信されたと推定される書簡5は、課題句「行水」の「草稿」に關する「おたづね」であったのだろうか。締切からまだ四日しか経たない時期に、この書簡は差し出されていたのだろうか。

真相に迫るうえで留意すべきは、鏡花の選出した「抱籠」十七句と「行水」十九句がともに、明治四十年九月発行の『俳藪』第二巻第十一号に掲載されたことだろう。「抱籠」の締切は七月十日であったにもかかわらず、ひと月あとの「行水」と同時に選句が発表されていたのである。この事実から推察すれば、書簡5の文面は、前月に締切を迎えていた課題句「抱籠」の「草稿」が手許に届かぬままであったための「おたづね」であったと受けとめられる。

書簡4、そして書簡5は、「こんなふうには俳藪の選句について、いや顔もせずに面倒を見て下されたものだ。」と麥人が追想していたとおりに、鏡花の心遣いを汲みとれる通信となっていた。

おわりに

以上、泉鏡花から星野麥人に差し出された五通の書簡を紹介し、それぞれの背景について考証した。ふたりの交流の一面を照らし出すうえで、明治三十六年から四十年にかけての五通が新たに確認されたことは喜ばしい。また、麥人の次の回想を受けると、本稿で取り上げた鏡花書簡が、もとより稀少価値を有するものであったらしいことも伝わってくる。

此の間探し出して置いたのが、どこへ入れたか、どこへはいつた

か鏡花氏の手紙が見つからぬ。手紙は鏡花氏か逗子に居られた時のばかりで、大塚の時は紅葉先生の文閲で用がすみ、牛込の時は近いので行けば済むのであった。

それで手紙といふものはない、行つておるすの時急用とならば町の昼席にはいつでもあるときまつてゐた。

(「手紙もの語／泉鏡花」／前掲)

鏡花の「大塚の時」とは、明治二十九年五月から三十二年秋までを、「牛込の時」とは、明治三十二年秋から三十八年夏までを指したものだ¹³。既述のとおり、「手紙」のやりとりがあつた当時の麥人は、牛込区水道町三十六番地に居を構えていた。右の一節によれば、少なくとも麥人の側では、近所に住んでいた鏡花に用事がある折には、「手紙」をしたためるのではなく、出向いて用件を伝えていたことが判る(余談ながら、「行つておるすの時」、「肴町の昼席にはいつでもあるときまつてゐた」という言及も、鏡花文学の成立基盤を考へるうえで看過しがたいものがある)。「行けば済む」、「それで手紙といふものはない」——こうした実情を鑑みると、鏡花と麥人が「手紙」を交わした機会とは、そもそも限られていたのかもしれない。そのように推測を働かせるならば、このたび新たに五通の麥人宛・鏡花書簡を確認できたこと、それに伴い、ふたりの交流の一面がより具体的に明らかになったことには、やはり深い意義が認められよう。

ところで、鏡花と麥人との接点をめぐっては、明治四十二年五月発行の『木太刀』第七巻第五号にも見過ごせない情報が載っていた。その「編輯だより」には、「六月号の巻頭小説は泉鏡花氏の創作に御座候」と

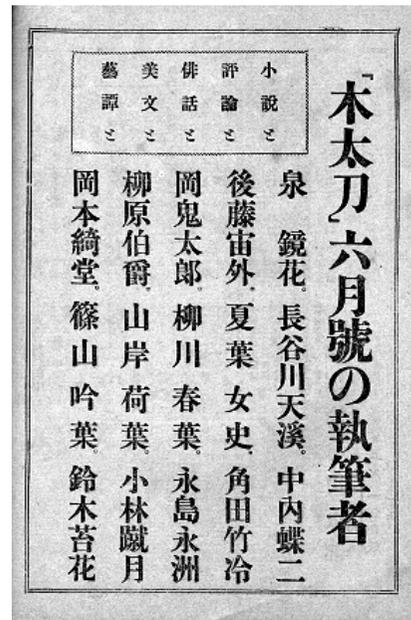


図1 『木太刀』(明治42年5月)／架蔵

の予告が見え、「木太刀」六月号の執筆者」を伝える誌面(図1)にも、鏡花の名前は筆頭に掲げられていたからである。

俳誌『木太刀』はもともと、秋声会の機関誌『卯杖』(第七巻第三号(明治四十二年三月)で終刊)を改題、巻次を引き継いだ「小説雑誌」であつた。そして、「木太刀」になつて早々第一号は発売禁止を命ぜられた¹⁴。憂き目に遭い、編輯担当の篠山吟葉の「病氣帰省」も重なつた結果、「半年たらずして、再びもとの俳句雑誌に返つてしまつた」という事情を抱え持つ(星野麥人「春夕(秋声会の想ひ出)／前掲。鏡花に小説の執筆依頼がかかつていたのは、『卯杖』から装いを新たに再出発したばかりの時期であつたことになる。ちなみに、当時、吟葉とともに『木太刀』の幹事を務めていたのが、ほかならぬ麥人であつた。この事実をふまえるならば、右の予告もまた、鏡花と麥人の親交をうかがわせるものと見なしてよいと思われる。

もつとも、翌月の『木太刀』六月号に鏡花の小説は掲載されず、残念

ながら流れてしまったようである。その理由は判然としない。

*

最後に、泉鏡花以外の書簡が取り上げられた星野麥人の「手紙物語（もの語）」を掲げておく。『紅葉全集』未収の紅葉書簡・一通、『定本高浜虚子全集』未収の虚子の麥人宛書簡・四通などが含まれるが、ここでは簡単な注記を添えるにとどめ、それぞれの文面の紹介は別の機会に譲りたい。

星野麥人「手紙物語（一）」（『木太刀』第三十五卷第七号、昭和十二年

七月五日）

星野麥人「手紙物語（二）」（『木太刀』第三十五卷第八号、昭和十二年

八月五日）

▼樋口一葉書簡（半井桃水宛）

星野麥人「手紙物語（三）」（『木太刀』第三十五卷十月号、昭和十二年

十月五日）

▼尾崎紅葉書簡（麥人によれば、「此の手紙のおもしろいのは某旗亭で、狎

妓某との合作になつてある。相手の人は、いづれ遊び中間の人で互ひに無遠慮なことを云ひ合ふ間柄の人と思はれる。」）

|| 紅葉・小ゑん合作の大嶋太郎宛書簡カ【『紅葉全集』（岩波書店）

未収】

星野麥人「手紙もの語」（『木太刀』第三十七卷第八号、昭和十四年八月

五日）

『鏡花全集』未収の書簡（吉田）

▼呉秀三書簡（麥人宛）、戸川残花書簡（大野洒竹宛）

星野麥人「手紙もの語」（『木太刀』第三十七卷第九号、昭和十四年九月

五日）

▼高浜虚子書簡・三通（麥人宛）【『定本高浜虚子全集』（毎日新聞社）

未収】、大野洒竹書簡（麥人宛）、水落露石書簡・二通（麥人宛）

星野麥人「手紙もの語」（『木太刀』第三十八卷第三号、昭和十五年三月

二十日）

▼高浜虚子書簡（麥人宛）【『定本高浜虚子全集』未収】、徳美愛櫻書簡

（麥人宛）

注

(1) うち一通（六五）・湯浅茂宛封書、大正五年六月二十日付）については、『鏡花全集』別巻収録書簡六五と同じものであるが、欠落部分があるため、改めて全文を収録し直した。」と注記されている（須田千里「解題／書簡」『新編 泉鏡花集』別巻一、岩波書店、平成十七年十二月）。

(2) 『日本近代文学大事典』第三卷（講談社、昭和五十二年十一月）、項目担当は柳生四郎。

(3) 田中励儀「天理大学附属天理図書館蔵 泉鏡花草稿四種——貧民倶楽部」「熱海の春」「光堂」「九九九会小記」——（『同志社国文学』第六二号、平成十七年三月）

(4) 「熱海の春」として発表された鏡花の麥人宛書簡は、早稲田大学図書館・本間久雄文庫に所蔵されている。

(5) 吉田昌志「尾崎紅葉の死——その前後（一）——」（『学苑』第九三九号、平成三十一年一月）では、「この（書簡1の——引用者注）文面からすると、門生のみの「衆議」が行われるごとくであるが、泉鏡花の「年譜」

(岩波書店版『新編泉鏡花集』別巻二、平成十八年一月二十日)にも記したように、紅葉の「十千万堂日録」によれば、二十五日の当日はこの席へ紅葉自身も加わって、結果のちの『換葉篇』に具体化される門生の献呈作品集の相談となった」と記述されている。「当初は門生のみ(衆議)の予定であったが、この会合のあることを知った紅葉が、みずから参加を申し出たの会議になった、というのが正しいのかもしれない。」とも付言されているが、『十千万堂日録』の記述のみを手がかりとするかぎりでは、紅葉が参会していたかどうかを判断することは難しい。

(6) 田中勳儀「葉草取」覚書(『泉鏡花文学の成立』双文社出版、平成九年十一月/初出は、『同志社国文学』第二三三号、昭和五十九年三月)、「小栗風葉「手楛足楛」と〈換葉篇〉——自筆原稿と「二六新報」から窺えること」(『同志社国文学』第八一号、平成二十六年十一月)に言及がある。

(7) 木谷喜美枝「加賀文庫蔵『十千万堂日誌』について」(『尾崎紅葉の研究』双文社出版、平成七年一月/初出は、『目白近代文学』第六号、昭和六十年十月)

(8) 木谷喜美枝「翻刻・加賀文庫蔵『十千万堂日誌』」(『尾崎紅葉の研究』双文社出版、平成七年一月/初出は、『目白近代文学』第七号、昭和六十二年三月、第八号、昭和六十三年九月、第十号、平成二年十一月)

(9) 通信省編『通信事業史』第二巻(通信協会、昭和十五年十二月)の「第二篇 郵便」/第三節「集配度数」に、「明治十八年六月の「郵便物集配等級規定」に於いては、配達数を標準として市内地は一等十二度より八等一度迄の八階級、市外地は一度と云ふことに定められた。同二十四年十月には市内地を七階級に減じて最低を三度に改め、後四十年十一月に至り市内地は最高取集十六度配達十二度、最低取集四度配達二度の十階級に改められた。」との記述がある。

(10) 村松定孝「泉鏡花書簡考」(5)星野麦人宛一(『泉鏡花』文泉堂出版、昭和四十一年四月/初出は、『学苑』二二五号、昭和三十六年五月)

(11) 『日本古典文学大辞典』第四巻(岩波書店、昭和五十九年七月)、項目担当は清水孝之。

(12) 該当する虚子書簡(『定本高浜虚子全集』未収)は明治三十二年七月九日付であり、「来る二十日頃には帰京仕度存居候」と綴られていたとお

り、「これは修善寺新井やに滞在の病氣保養中」の一通であった。当時の虚子が「伊豆修善寺温泉に在りて病後の補養中」(『消息』)であったことは『ほととぎす』(明治三十二年七月二十日)において報じられており、誌上には関連する虚子書簡(『全集』未収)も掲載されている。また、帰京したのは七月二十日であった(無署名)「消息」『ほととぎす』明治三十二年八月十日)。この事実には照らせば、明治三十二年七月九日は「子規庵例会に出席」と記されている「虚子研究年表」(『定本高浜虚子全集』別巻、毎日新聞社、昭和五十年十一月)は、修正を要する。

(13) 吉田昌志「年譜」(『新編泉鏡花集』別巻二、岩波書店、平成十八年一月)

(14) 『尾崎紅葉事典』(翰林書房、令和二年十月)において、篠山吟葉の生没年は「未詳」とされている(項目担当は溝部優実子)。ただし、麥人「誌上座談」(『木太刀』第四十九巻第二号、昭和二十七年二月)に、「昭和二十六年十二月三日篠山吟葉逝く此のしらせを受けた時の驚きは一寸狼狽したのです。」とある。

◆本稿は、泉鏡花研究会(第七十二回大会、令1・12・7、於昭和女子大学)での発表をふまえ、新たに考察を加えたものである。当日、会場にて貴重なご意見を賜った方々に、記して深謝申し上げます。